

民族藝術学会第 39 回大会案内

発表要旨集

会 期： 2023 年 4 月 22 日(土)、23 日(日)

主 催： 民族藝術学会

会 場： 南山大学 G30 教室

(理事会・評議委員) H13 教室

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

テーマ： ミュージアムと“arts/”

キャンパスマップ：



大会事務局： 南山大学

民族藝術学会第 39 回大会実行委員会

実行委員 宮脇千絵 (委員長)、亀井哲也、黒澤浩、張玉玲、廣田緑

プログラム：

第1日目 4月22日(土)

11:00	理事会・評議員会 (H13 教室)	
12:15~13:15	南山大学人類学博物館見学 (自由参加) 案内：黒澤 浩 [1回目] 12:15~12:45 [2回目] 12:45~13:15	
13:30	開会の挨拶 会長・吉田 憲司 当番校 人類学研究所所長・渡部 森哉	
13:45~16:35	シンポジウム ミュージアムと「民族衣装」 (南山大学人類学研究所共催) 司会：宮脇 千絵	
13:45~13:50	趣旨説明	宮脇 千絵 (文化人類学)
13:50~14:15	ファッション展と民族衣装－アメリカのミュージアムを中心に	平芳 裕子 (表象文化論)
14:15~14:40	断片化する民族衣装：収集から展示までの過程に着目して	佐藤 若菜 (文化人類学)
14:40~14:50	休憩 (10分)	
14:50~15:15	文化学園服飾博物館における「民族衣装」の展示	村上 佳代 (服飾)
15:15~15:40	衣の民具とキュレーション－展示における自己と他者	加藤 幸治 (民俗学)
15:40~15:55	コメント	杉本 星子 (文化人類学)
15:55~16:05	休憩 (10分)	
16:05~16:35	討論	
16:35~16:50	休憩 (15分)	
16:50~17:40	総会 第20回木村重信民族芸術学会賞授賞式	

第2日目 4月23日(日)

9:30~12:05	一般発表 (発表 25分、質疑応答 10分、入れ替え 5分)	
9:30~10:05	バルトークの《ピアノ・ソナタ》第3楽章における民俗器楽の特徴－何を、どのように取り入れたか	木村 優希 (音楽)
10:10~10:45	真境名由康の創作における大和芸能の摂取－創作舞踊「わたんじゃー舟」と「石井の七福神」(福島県二本松市)	児玉 絵里子 (芸術学)
10:50~11:25	ファウラー・ミュージアムとオールマイティ・ゴッド－「How Do You See This World?: The Art of Almighty God」展覧会より	森 昭子 (人類学)
11:30~12:05	中国芸術人類学の課題と可能性－資源・身体・協働の先へ	丹羽 朋子 (民族学)
12:05~13:15	休憩 (70分)	
13:15~15:10	一般発表	
13:15~13:50	現代スウィック教社会における大衆宗教版画の展開－ナショナルリズムから偶像崇拜論争へ	池田 篤史 (美術)
13:55~14:30	西洋に渡ったアジアの「宣教美術」－1920~60年代を中心に	古沢 ゆりあ (美術)
14:35~15:10	前衛書家井上有一の制作姿勢と身体性－1962年の制作メモに基づいた一考察	向井 晃子 (美術史)
15:10~15:20	休憩 (10分)	
15:20	閉会の挨拶	
15:30~16:30	南山大学レーモンド建築見学 (自由参加) 案内：濱田 琢司	

■シンポジウム ミュージアムと「民族衣装」

4月22日（土）午後 13:45～16:35

13:45～13:50 趣旨説明

宮脇 千絵（文化人類学）

衣服は、それを着用する人のさまざまな情報（文化的背景や社会的なポジション、個人のアイデンティティなど）を視覚的に、かつ即時的に伝えるものである。しかしひとたびミュージアムに収集・展示されると、それが存在していた文化的・社会的な文脈からの分断のみならず、それを身に着けるはずの身体からも切り離されることとなる。ミュージアムでは、身体を失った衣服のどのような側面に注目し、展示してきたのだろうか。ミュージアムにおいて「異文化の器物」が「美術」へと仕立てられてきた歴史、および民族学博物館と近代美術館の差異をめぐって展開されてきた議論は、民族名や地域名が表記される「民族衣装」の展示と、デザイナーやブランド、時代の変遷を表象するファッション展示との関係にも通ずる。ただし元来身体性をともなう衣服は、異文化/自文化、器物/美術といった明確な線引きで振り分けられるものでもない。そこで本シンポジウムでは、「民族衣装」展示がどのように展開されてきたのかを、「民族衣装」研究、ファッション展示研究、民具研究の視点から探る。

13:50～14:15 報告1 ファッション展と民族衣装—アメリカのミュージアムを中心に

平芳 裕子（表象文化論）

ファッション展は主に西洋の歴史衣装や現代の流行服の展示として発展してきたが、アメリカのファッション展の成立に「民族衣装」が果たした役割についてはあまり知られていない。そこで本発表では、アメリカのミュージアムにおいて民族衣装がどのように見出され、ファッション展を成立させることになったのかについて検討する。アメリカでは第一次大戦を契機として、ヨーロッパの模倣ではなく独自のファッションデザインを模索する運動が起きた。ファッションにおけるアメリカらしさ、すなわちナショナルアイデンティティの追求において、いかに先住民の衣服や工芸品が想像力の源泉とされ、アメリカのファッションの正統性が作り出されていったのか。その経緯を20世紀前半のミュージアムとファッション業界の共同作業に注目しつつ考察する。

14:15～14:40 報告2 断片化する民族衣装：収集から展示までの過程に着目して

佐藤 若菜（文化人類学）

本発表でとりあげるミャオ族の民族衣装は、1981年に日本の6都市で開催された「中国55少数民族服飾展」と1984年に北京で開催された「中国ミャオ族服飾展」を契機に世界的に収集・展示されるようになった。大英博物館や中国美術館をはじめとした国立・公立の博物館や美術館だけでなく、収集家等による私設博物館がミャオ族の衣装を展示してきた。本発表の目的は、中国内外のミュージアムで展示されてきたミャオ族の民族衣装がどのように集められてきたのか、その一端を明

らかにすることである。特に、ミュージアムでの展示にあたって民族衣装を提供してきた中国国内の美術家2名と私設博物館館長1名へのインタビューをもとに、衣装が展示されるまでの過程と価値の変遷を示す。結論では、展示以外の目的のために衣装収集が行われてきたこと、特にデザインリソースとして収集されるなかで衣装の断片化やプリント化が起きていたことを指摘する。

14:50～15:15 報告3 文化学園服飾博物館における「民族衣装」の展示
村上 佳代（服飾）

文化学園服飾博物館は、ファッションの教育機関である文化学園大学、文化服装学院（母体は1923年に創立）の附属施設として1979年に開館した。服飾資料の収集は戦後から始まったが、最初に受け入れたまとまったコレクションは、旧陸軍の関連団体が収集したアジアの民族衣装類であり、洋裁の学校でありながら、欧米の衣装の収集のみにこだわらない方針が当初からあった。服飾博物館では「衣を通して日本と世界の文化を知る」をテーマとし、地域を超えて相違点や共通点を浮き彫りとする横断的な展覧会が特色となっている。また、衣服を「時代や生活を背景として、人が作り、着る（装う）もの」と位置付けた展示を心がけ、「民族衣装」「ファッション」といった境目を作らないことで、クリエイターを目指す学生たちが、服に対して様々な見方や捉え方ができるよう期待している。

15:15～15:40 報告4 衣の民具とキュレーション —展示における自己と他者—
加藤 幸治（民俗学）

人が着るものの展示において、キュレーターはそれを着る人々の生活を表現しようと試みるものである。しかしそこに常に現れるのは着る人の不在であり、展示の工夫による生活の現場のリアリティは演出できても、着るという行為のアクチュアリティはなかなか表現し得ない。近年、地域住民との協働や、アートやデザインと結びついた実験的な民具展示が試みられている。展示は民俗誌／民族誌のようなテキストとは異なり、展示されたものが展示空間に「在る」という顕在性が、来場者それぞれの記憶を喚起したり、思わぬ理解のすれ違いが生じたり、企画者の意図しない対話がうながされたりすることがある。身体感覚と結びついた衣の展示は、そうした重層的な関係性がより先鋭的に現れるものである。本発表では民具研究と、日本の博物館における民俗展示の展開をもとに、衣文化の民具に投影される自己と他者の入り組んだイメージについて考察してみたい。

15:40～15:55 コメント
杉本 星子（文化人類学）

16:05～16:35 討議

■一般発表 4月23日(日)午前

- 9:30~10:05 バルトークの《ピアノ・ソナタ》第3楽章における民俗器楽の特徴
－何を、どのように取り入れたか
木村 優希 (音楽)

ハンガリーの作曲家バルトーク・ベーラ BARTÓK Béla (1881-1945年)は、母国や周辺地域の民俗音楽を収集、研究し、自身の創作活動に取り入れた。彼の唯一の《ピアノ・ソナタ》(1926年)はその一例で、終楽章である第3楽章(以下、対象楽曲)では、民謡に似た主題が用いられたり、民俗音楽の演奏における手法が反映されるなど、民俗音楽の要素が多様なレベルで見出される。先行研究では、対象楽曲中の2つのエピソード部について、それぞれフルヤ(笛)とヴァイオリンの演奏スタイルが盛り込まれていることが指摘されている(Somfai 1981)。本発表では、このエピソード部に着目し、彼が作曲当時目にしていただろう民俗音楽コレクションと、「民俗音楽と芸術音楽の関係」について述べた彼自身の論考に基づいて考察する。これにより、彼が自身の創作に民俗音楽の何を取り入れ、どのように変容させたのか、その手法の一端を明らかにすることを目指す。

- 10:10~10:45 真境名由康の創作における大和芸能の摂取
－創作舞踊「わたんじゃー舟」と「石井の七福神」(福島県二本松市)
児玉 絵里子 (芸術学)

真境名由康(1889.10.8-1982.2.2)は、御冠船踊の継承者玉城盛重(1868.3.1-1945)に師事して組踊と古典舞踊を修め、第二次世界大戦後の琉球芸能復興に尽力して数多くの創作を生んだ名優である。主要作品に朝薫五番に典拠した舞踊劇「人盗人」、組踊「金武寺の虎千代」、歌劇「伊江島ハンドグラー」、舞踊「糸満乙女」などがあるが、その創作の手法や源泉に関する詳細な研究は従来殆ど行われていない。本発表では由康が戦前、演劇研究のため東京・大阪などを訪れ(1929年(昭和4)9月~1930年(昭和5)1月)、大和芸能に対して積極的関心を示した事実をふまえ、由康の創作舞踊「わたんじゃー舟」と福島県二本松市に伝わる「石井の七福神」(1995年(平成7)国指定重要無形民俗文化財認定)における重要な類似点に着目し、由康が同芸能等に触発され「わたんじゃー舟」を創作した可能性を指摘する

- 10:50~11:25 ファウラー・ミュージアムとオールマイティ・ゴッド
－「How Do You See This World?: The Art of Almighty God」展覧会より
森 昭子 (人類学)

2022年1月16日から11月20日にかけて米国カリフォルニア州UCLA附属ファウラー・ミュージアムにて「How Do You See This World?: The Art of Almighty God」展覧会が開催された。ガーナ人アーティストのクワメ・アコト、通称オールマイティ・ゴッドの作品、約80点を展示したものだ。本企画はアカン美術専門で、元館長でもある故ドラン・ロスが最晩年に取り組み企画した展覧会のうちのひとつだった。本発表ではオールマイティ・ゴッドと彼がガーナの地方都市クマシで制作する作品を中心軸とし、そこから築かれるコレクターやキュレーターとの関係性、そしてミュージアムやコレクションが作家と作品に及ぼす影響や相互作用について考察し、本企画展の特異性や、作家がガーナから起こした展覧会に対するアクションについて検討する。

11:30～12:05 中国芸術人類学の課題と可能性－資源・身体・協働の先へ
丹羽 朋子（民族学）

本発表では現代中国における芸術実践を対象とする人類学的研究の動向を、中国国内外で刊行された民族誌的著作の研究視角や文体に着目し概観する。中国国内では従来の作家主義的な芸術理論研究に対抗して2000年代から「芸術民族誌」的手法が興隆し、2006年設立の中国芸術人類学会を主たる母体として、国家の重点開発地域の文化資源の保護・発展を目的に学際的研究グループによる組織的フィールド調査が行われてきた。それらは「遺産から資源へ」を標榜し、都市化に伴う民族芸術の変化や芸術家による「地域アート」的实践を社会的事象として捉える傾向がある。他方、欧米や日本の人類学的著作では現代人類学理論との対話を交えてジェンダーや権力関係等が埋め込まれた「社会身体」や、調査者も含む参加者の協働的過程を注視する記述がみられる。これらの比較考察を通じ、中国における「芸術」とは何か、ある実践が「芸術」とみなされる意味等にも議論を進めたい。

■一般発表 4月23日(日)午後

- 13:15～13:50 現代スウィック教社会における大衆宗教版画の展開
ーナショナリズムから偶像崇拜論争へ
池田 篤史 (美術)

現代のスウィック教社会では、教主たちを描いた大衆宗教版画は非常に人気があり、寺院や家屋、店舗など様々な場所で見ることができる。本報告では、1947年の印パの分離独立以後に、スウィック教のナショナリズムがどのように大衆宗教版画の図像を変化させたかを明らかにする。報告者が資料として使用するものは、1970年頃にマクラウド氏によって収集された大衆宗教版画と、2010年の現地調査で筆者がアマリットサルの工房から購入したカタログに掲載されている大衆宗教版画である。この二組の作品群を比較すると、マクラウド・コレクションは絵画的で説明的な図柄であるのに対し、アマリットサル・カタログはより彫塑的で象徴的な表現となっていることがわかる。このような図像の変化と並行して、従来の主要な消費者であった都市中間層から一般大衆へとターゲットが拡大し、その結果スウィック教社会では2000年代から偶像崇拜論争が活発化してきていることを指摘する。

- 13:55～14:30 西洋に渡ったアジアの「宣教美術」ー1920～60年代を中心に
古沢 ゆりあ (美術)

本発表は、20世紀前半～半ばに西洋のキリスト教界でおこった「宣教美術」を対象とし、西洋人宣教師らのネットワークによる各宣教地で宣教美術の創出の奨励と、それに呼応したアジアの美術家たちについて、当時の国際的な人と作品の移動と受容を、西洋での博覧会やコレクション、出版といった場を手がかりとしてさぐる。宣教美術とは、宣教師がアジアやアフリカなどの宣教地において奨励したキリスト教美術の一形態である。本発表では、1920年代からチェルソ・コンタンティーニらの主導によって各地で創出された現地の様式によるキリスト教美術の潮流を、カトリックにおけるひとつの芸術運動としてとらえ、宣教美術の名称で指す。宣教美術は、アジアやアフリカの広範囲で行われたものであるが、その中から日本の事例を中心とし、関連のあった中国などアジアの国々にも言及しつつ、作品の特徴と西洋におけるその評価についてみていきたい。

- 14:35～15:10 前衛書家井上有一の制作姿勢と身体性ー1962年の制作メモに基づいた一考察
向井 晃子 (美術史)

本発表では、前衛書家井上有一の制作姿勢と身体性を、制作メモを基に読み解く。「俺ノ場合、制作ノ全貌」と題されたそのメモは、「イメージ」、「体」、「動き」というキーワードを伴うダイアグラムである。書の鑑賞や分析では実践の経験が影響する特徴があるため、発表者の書の実践とそこから発展した身体性の探究を参照して、考察を進める。まず制作メモの内容を確認し、次に劇作家で演出家の岡田利規のワークショップと、92歳で現役の合気道家多田宏の稽古での実践を参照して井上の制作に迫る。前者では鮮明なイメージを思い描くことで変化する身体の動きが探究され、後者では「想像の線」の使用が促されている。こうした想像上の視覚性を用いる身体訓練と井上の制作メモの比較によって、彼の制作では文字を経由したイメージが身体性を伴って、作品に変換されている様相が明らかになるだろう。そこでは、身体の動きが文字を起点に喚起されているのである。

南山大学人類学博物館（R棟地下1階）

南山大学人類学博物館は、神言修道会による研究活動から始まり、人類学・考古学をはじめとした人文諸学の学術研究の成果を全ての人と分かち合い、それを通して人類の多様性を尊重しながら、南山大学の教育モットーである「人間の尊厳のために」を実践する博物館です。また、大学博物館として、大学と社会とをつなぐ役割を果たし、そして、収集・管理する学術資料の研究を通して、学術研究の将来に向けた新たな展望を構築する努力をしています。

(<http://rci.nanzan-u.ac.jp/museum/>)

南山大学レーモンド建築

アントニン・レーモンド：

ボヘミア地方グラドノ（現在のチェコ共和国）生まれ。1919年、近代建築巨匠のひとり、フランク・ロイド・ライトの助手として帝国ホテル建設のために来日。その後1973年に85歳で日本を去るまで、第二次世界大戦前までの18年間と戦後の26年間のあわせて44年間を日本に滞在し、自然と風土に根ざした実用的で美しい建物を作り出した建築家として知られている。また、日本独自のモダニズム建築を確立した建築家・前川國男や吉村順三から師と仰がれた。

妻のノエミ・レーモンドは家具などのデザイナーであり、民芸運動の創始者・柳宗悦をはじめ当時のすぐれた芸術家、思想家と親交をもったレーモンド夫妻は、日本の暮らしの中に生きる美、日本独自の伝統的な空間と生活の価値を深く理解した。南山大学における床のパターンや家具の一部は主にノエミによる。

(<https://www.nanzan-u.ac.jp/raymond/>)